

中国語を母語とする日本語学習者の主語省略の習得について

—主題予測性をめぐって—¹

Research about Acquisition of Subject-Omission for Native Chinese Speakers: Focusing on the Predictability of Topic

付 改 華

FU Gaihua

This paper focused on the topical function of subject-omission and involved some questions to make it clear how the Japanese-Learner grasp the four patterns of topic-omission-sentence reported by Kuno (1978). As a result, it was found that the subject-omission could be admitted when the subject is also a “Repeated topic” or when it is coreferent with the subject of the preceding sentence. On the other hand, it is difficult to be admitted when it is a “new topic” or when it is different from the topic of the preceding sentence for the Japanese-Learner. There are four reasons for this result: (1) using of the conjunction or not, (2) recognition of the topic function, (3) confusion between topic and subject, (4) ignoring view constraints.

キーワード： 主題性、主題機能、視点制約、母語干渉

0. はじめに

日本語における主語省略について、これまで多くの議論がなされており、日本語習得に大きな示唆を与えている。しかしながら、作文の指導現場では次のような文がしばしば見られる。

(1) 中に女の子が1人いた。彼女は頭がよくて、日本語がペラペラだった。

(1) は筆者が中国語を母語とする日本語学習者（以下は学習者という）の作文を添削した際しばしば見られる例文であり、下線部の「彼女は」が省略できるかと日本語母語話者に確認したら、明らかに省略可能ということだった。しかし、筆者の経験では、学習者は省略よりは非省略にするのが普通である。本稿では、このような日本人の認める主語省略文が学習者の中でどれほどの許容度になるかを調べ、主語省略の習得問題点を明確にするこ

とを試みたい。

1. 先行研究

1.1 日本語における主語省略について

日本語における主語の省略については、議論が多くなされており、大きな成果を収めた。

寺村 (1982)、田窪 (1997)、仁田 (1999) は、述部の人称制限から、特に感情的述語、授受動詞、受身表現、敬語表現などの文構造での主語省略を議論している。これらの研究は、主語省略の習得に有益であり、中国でも盛んに検討・再検討されている (楊 2013、徐 2017、許 2019 など)。しかし、主語省略文の理解や産出には、文より上位な談話的要因が関与すると認められ、談話構造で議論を展開する研究も盛んに行われている。

談話構造で主語省略についての議論は、主に主題との関連で行われている。三上 (1969 : 117) は、次のような例をとり上げ、「Xハ」がピリオド (マル、句点) を越えて、次々の文まで及んでいく」という「ハ」のピリオド越え現象を指摘している。

(2) 父ハ茶ノ間ヘハハイラナカッタ。隣リノ間ニ座ッタ。

(三上 1969 : 117)

(2) では、「父ハ」がピリオドを超えて、次の文「隣リノ間ニ座ッタ」の主題となり、しかもその文で省略されている。

久野 (1978) は、視点制約²の観点から主題の省略を「反復主題省略」、「主語を先行詞とする主題省略」、「新主題省略」、「異主題省略」という 4 つのパターンに分け、それぞれの適用条件を検討している。それぞれの適用例は次のように挙げられている。

(3) a. 父ハ茶ノ間ヘハハイラナカッタ。〔父ハ〕隣リノ間ニ座ッタ。

(久野 1978 : 103)

b. 太郎ガ尋ネテ来タ。〔太郎ハ〕一年間会ワナイ内ニ、スッカリ大人ッポクナッテイタ。

(久野 1978 : 103)

c. 太郎ガ僕ニ話シカケテ来タ。ダケド、〔僕ハ〕知ラン顔ヲシテ、返事ヲシテヤラナカッタ。

(久野 1978 : 107)

d. 太郎ガ花子ヲ家マデ送ッテ来テクレタ。〔花子ハ〕家ニ上ッテオ茶デモ飲ンデカラオ帰リニナッタラト誘ッタ。

(久野 1978 : 104)

e. 太郎ハ花子ヲ病院ニ見舞ッタ。〔花子ハ〕思ッタヨリ元気デアッタ。

(久野 1978 : 108)

(3a) は反復主題「父ハ」が第二文で省略された「反復主題省略」例であり、三上 (1969) が指摘した「X ハ」のピリオド越えと同じパターンであるように考えられる。(3b) は第一文の主語「太郎が」が第二文の主題として省略された「主語を先行詞とする主題省略」例である。(3c) と (3d) はそれぞれ第一文の対格補語「僕二」と目的格補語「花子ヲ」が第二文の主題として省略された「新主題省略」例である。一方、(3b)、(3c)、(3d) ではいずれも第一文で「～ハ」の形で提示された主題がないのとは違い、(3e) では第一文で「太郎ハ」という文の主題があるにもかかわらず、その目的格補語が第二文で主題となり、「異主題省略」となる。

一方、砂川 (1990) は、談話の枠組みで主題の省略条件を検討し、省略が可能なのは省略されたものが何を指し示しているのかが読み手に理解可能な時であり、特に、それが直前の文の中で主文の主語の位置を占めているときは、復元可能性がきわめて高くなると指摘している。

主題性の観点から主語省略を研究するという先行研究は極めて示唆的で、主語省略文の理解や習得に大変有益であることが伺える。本稿では、この主題性の予測性から学習者の習得問題点を捉えたいと考える。

1.2 日本語主語省略の習得について

日本語主語省略の習得に貢献するのは、対照研究、教授法研究、誤用研究などが挙げられる。主語省略に関する日中対照研究には、日中両言語における主語省略と非省略の対称関係の対照 (小川 1989、高 2013)、人称制限のある述語の対照 (邵 2012)、先行詞の構文や視点制約の観点からの対照 (張 2007、謝 2019) などが見られる。教授法の研究では一、二人称主語の人称制限表現が整理され、教育現場での注意点が提言されている (楊 2013、王 2016、許 2019)。一方、主語省略をテーマとする誤用研究は見られなかった。それぞれの研究、特に人称制限の研究は教育現場に実用され、中上級までに人称制限の基本知識が備えられるのに大変有益であるが、(1) のような省略文の理解や産出にはさまざまな誤用が見られることが問題である。

2. 本稿の立場と研究方法

モデル文の理解や作文の指導にテキスト構造の指導が重要であることは門脇 (1999)、宮谷 (1999)、本郷 (2004)、藤森 (2005) で指摘されている。その中、宮谷 (1999) は、初級日本語学習者の作文に見られる談話レベルの問題点を指摘し、作文指導における談話レ

ベルの問題点を解決するためには、文章全体の論理展開の指導と論理のまとまりを構成する一文一文の接続レベルの指導の両方が重要であることを主張している。本稿では、これらの先行研究に従い、主語省略文の理解と産出の習得は談話構造への理解が重要であるということを基本立場とし、学習者は主語省略にかかわる談話的要因、特に主題性の理解についてどのような問題点を抱えているのかを考察し、具体的には、次のようなことを明らかにしたい。

- 1) 日本人の許容可能な主語省略文について中国語母語話者はどのような許容度を示すか。
- 2) 許容度に偏りが生じる場合は、その要因は何か。
- 3) 学習者の誤用に日中両言語の談話構造の異なりが見られるか。

考察にあたり、先行研究を踏まえ、久野（1978）が提唱した「反復主題省略」、「主語を先行詞とする主題省略」、「新主題省略」、「異主題省略」のそれぞれの例文、即ち前節で挙げた

(3)に基づき、次の調査問題を設定した。目的は、日本人が許容可能な省略文について、学習者にはどのぐらいの許容度を示すか、また学習者がこれらの文を出されて、どのように主題を抽出するのかを考察することである。調査対象は中国南通大学外国語学院日本語科3年生の19人である。

() の a、b から適切だと思われるものを選びなさい。

- ①父は茶の間へは入らなかった。(a 父は b φ) 隣りの間に座った。
- ②太郎が尋ねて来た。(a 太郎は b φ) 一年間会わない内に、すっかり大人っぽくなっていた。
- ③太郎が僕に話しかけて来た。だけど、(a 僕は b φ) 知らん顔をして、返事をしてやらなかった。
- ④太郎が花子を家まで送って来てくれた。(a 花子は b φ) 家に上ってお茶でも飲んでからお帰りになったらと誘った。
- ⑤太郎は花子を病院に見舞った。(a 花子は b φ) 思ったより元気であった。

3. 調査結果

調査結果は次の表1で示すことができる。

	非省略と判断した人数	省略と判断した人数
	～人 (比率)	～人 (比率)
反復主題省略 (①)	5 (26.32%)	14 (73.68%)
主語を先行詞とする主題省略 (②)	5 (26.32%)	14 (73.68%)
新主題省略I (③)	19 (100.00%)	0 (0.00%)
新主題省略II (④)	14 (73.68%)	5 (26.32%)
異主題省略 (⑤)	17 (89.47%)	2 (10.53%)

表1 各主題省略文の許容度調査

表1で次のことがわかる。久野(1978)で検討した主語省略文のうち、学習者にとって最も許容度が高いのは「反復主題省略(①)」と「主語を先行詞とする主題省略(②)」で、両方とも73.68%の比率となる。それに対して、「新主題省略(③、④)」と「異主題省略(⑤)」は高い比率で許容不可能となる。また、ここで「新主題省略」に適用する③と④の許容度に大きな偏りが生じることに興味深い。

4. 調査分析

本節では、久野(1978)の提唱した視点制約の観点から問題の主題省略4パターンの習得問題点を検討する。

4.1 「反復主題省略」と「主語を先行詞とする主題省略」について

考察では、四パターのうち次の「反復主題省略(①)」と「主語を先行詞とする主題省略(②)」の許容度が最も高かった。

①父は茶の間へは入らなかった。(a 父は b φ) 隣りの間に座った。(a : 5人 ; b : 14人)

②太郎が尋ねて来た。(a 太郎は b φ) 一年間会わない内に、すっかり大人っぽくなっていた。(a : 5人 ; b : 14人)

久野(1978 : 103)では「反復主題省略」の適用条件は「第一文と第二文の主題が同一である場合は、第二文の主題を省略できる」と、「主語を先行詞とする主題省略」の適用条件は「Xガ.....。Xハ.....。」の「Xハ」は省略できる」とされているが、これは中国語にも適用できるように考えられる。Li & Thompson(1976)は言語類型論の観点から英語が主語卓越言語であるのに対して、中国語と日本語などが主題卓越言語であることを議論しているが、後Li & Thompson(1981)で中国語を中心として主題の反復という意味での“topic-chain

(主題連鎖) ”について議論を展開している。

一方、反復主題と第一文主語の主題性について、Givón (1983) に興味深い議論がある。Givón (1983) は指示対象が文のどの成分に表現されるかによって話題としての安定性に異なりが生じ、文の成分を主題性の高いものから順に並べると「主題 > 主語 > 目的語 > その他」のような配列になると指摘している。本稿で観察した学習者の省略主題に関する許容度はこの主題予測可能性のスケールを裏付けながら、主題性が省略をもたらす談話的要因であることの更なる証拠となる。また、第一文の主題が第二文で維持される場合、その主題が第二文で省略されるといういわゆる反復主題省略は中国語と日本語との共通点であるように考えられる。

しかし、非省略と判断した学習者が観察されなかったというわけではない。これについてインタビューを行ったが、①については、「彼は」にしたかったが、「彼は」がないから、「父は」にした」という回答だった。確かに、中国語に直訳すれば、「他(彼は)」があったほうが自然であるように考えられる。なぜなら、直訳すれば文間意味関係を表す接続詞が訳せないからである。日本語には接続詞がなくとも高い程度で文間意味関係が認められているが、中国語の場合、接続詞がないと話の流れがいったん断たれたように思われ、主題維持のためにもう一度主題を明示することが普通である(高 2013)。

②については、「太郎が私のところに尋ねて来たと思うから、第二文でもう一度「太郎」を明示したほうがわかりやすい」という回答だった。つまり第一文の「訪ねて来た」により「私」の潜在性が捉えたから、第二文で「私」と「太郎」を混同させないために「太郎」を明示したのである。しかし、大多数の学習者が判断できるように、ここでは文脈で二文目の主体が「私」か「太郎」かがわかるから、省略しても意味の理解には支障がない。つまり、文脈理解での誤用判断であるように考えられる。

しかし、次節で検討する「新主題省略」についての調査でも伺えるが、②について省略と判断した学習者の中、「太郎が」を反復主題に間違えて、第二文で省略とされた人も多くいる。これはインタビューでも確認できた。「は」と「が」の区別意識を強調するうえで、主語の省略を指導する工夫が必要である。

4.2 「新主題省略」について

表1でわかるように「新主題省略」に適用する③と④の許容度に大きな偏りが生じている。④については5人省略を許容したが、③については19人の調査対象すべて省略を許容不可とした。

③太郎が僕に話しかけて来た。だけど、(a 僕は b φ) 知らん顔をして、返事をしてやらなかった。
(a: 19人; b: 0人)

- ④太郎が花子を家まで送って来てくれた。(a 花子は bφ) 家に上ってお茶でも飲んでからお帰りになったらと誘った。
(a: 14人; b: 5人)

久野(1978)では、「新主題省略」の適用条件は次のように述べられている。

「Yガ……X……。Xハ……」という二つの文の連続がある時、「Xハ」が省略できるのは、第一文も第二文も、Xの目から見た記述($E^3(X)=1$)であるか、YよりもX寄りの視点から見た記述($1>E(X)>E(Y)$)である場合に限られる。但し、 $E(X)$ の値が1に近ければ近い程、「Xハ」の省略が容易になる

(久野1978: 107)

③では「僕に」と「話しかけてきた」とのいずれから「僕」寄りの視点が捉えられ、明らかに「僕」の目から見た記述($E(X)=1$)である。④では「花子を」(「私を」ではないことに注意してほしい)と「送って来てくれた」の関係で「太郎よりも花子寄りの視点から見た記述($1>E(X)>E(Y)$)」となるので、省略可能な文となる。

しかし、調査結果から見ると、学習者には視点制約の意識がなく、ただ第二文で出された選択肢は第一文の主語と違うから明示したのではないかと推測できよう。事実、この推測はインタビューで確認できた。今までの教科書などで単文の述語だけに絞って視点制約について指導はしているが、文連続ないし談話で指導しないと文章力の向上が求められないと言えよう。

もう1つ大事なものは、③、④での「太郎が」の捉え方である。主語である「太郎が」は主題として捉えられて、第二文で主題となる「僕は」、「花子は」とぶつかることを避けるためにわざと「僕は」、「花子は」を明示したのである。問題の種は「～が」と「～は」の談話上の理解である。つまり、前節でも強調したが、「は」と「が」の談話的機能を区別するうえで、主語の省略を指導する工夫が必要である。

一方、④について省略と判断した学習者5人をインタビューしたら、「自分にもわからないが…」とか、「③に「僕は」がないと完全な文ではないような感じ」という回答だった。特に談話で一人称が主語あるいは主題の位置に一回出ないと、次の発話で省略されるのが不自然であるように考えているようであるが、普段の指導でできるだけ多くの使用例を読ませる同時に視点制約を強調すればより効果的だろうと考えられる。

4.3 「異主題省略」について

「異主題省略(⑤)」は「新主題省略(④)」と同じような傾向が見られた。

⑤太郎は花子を病院に見舞った。(a 花子は b φ) 思ったより元気であった。

(a : 17人 ; b : 2人)

久野(1978)は、「異主題省略」の条件を次のように述べている。

「Yハ……X……。Xハ……」という二つの主題文の連続がある場合、「Xハ」が省略できるのは、話者の視点がYのそれと完全に一致し(即ちE(Y)=1)、第二文もYの視点からの記述である場合に限られる。

(久野 1978 : 110)

久野(1978)によれば、⑤では、第二文は、太郎の花子に対する直接的な気持、観察を表しているという点で、依然として、太郎に関する陳述と解釈してもよいとされる。そうすれば、省略された「花子ハ」は、第一文の「太郎ハ」のピリオド越えをブロックしているのではなく、その領域に入っているものと考えられる。即ち、第二文の主題「花子ハ」が、第一文の主題「太郎ハ」という大主題の中に含まれた小主題であるという考え方である。

しかし、学習者は主題「～は」の「ピリオド越え」機能も視点寄り機能も習得せず、より客観的に「太郎」と「花子」を捉え、前後項の動作の主体を混同させないように両方とも明示する傾向が見られた。省略可能と判断した学習者は2人いるが、インタビューで「わからない」といったので、更なる調査が必要であるように考えられる。この調査結果については、久野(1978)が検討した次の例を学習者に比較させ、この種の省略文を強調したい。

(4) a. 太郎ハ花子ヲ病院ニ見舞ッタ。[花子ハ] 思ッタヨリ元気デアッタ。(=⑤)

b. 太郎ハ花子ヲ病院ニ見舞ニ行ッタ。* [花子ハ] 太郎ニ会オウトシナカッタ。

(久野 1978 : 108)

(4a)で省略が認められる一方、(4b)では、第二文の主題「花子ハ」は、否定意志を表す述語「太郎に会おうとしなかった」の存在により、独立性の高い主題となる。すると、第一文の主題「太郎ハ」と対等の位置にあるので、省略されると不自然になる。

5. 終わりに

以上、久野(1978)で検討した4パターン主題省略文が学習者にどれほどの許容度があるかについてアンケート調査で考察した。結果は、次のようにまとめられる。

1) 反復主題省略の許容度が最も高いが、中には接続関係を表す接続詞がないと省略しに

くいという母語干渉によって許容しない学習者がいる。

2) 「主語を先行詞とする主題省略」の許容度が一見高く見えるが、学習者が第一文の主語を主題と間違えてしまい、「反復主題省略」として許容を示したことがインタビューでわかった。また、文中に他の干渉主体が存在すると捉え、混同を避けるため非省略と判断した学習者がいる。

3) 「新主題省略」と「異主題省略」の許容度が極低いことがわかった。主題を表す「～は」の主題維持機能を十分認識していない一方、主語を表す「～が」を主題に捉え間違ったことも原因である。もっとも大事なことに、日本語の談話構造で重視されている視点の一貫性や共感性についての習得度が極低いことから、今後談話の枠組みで主題と主語の機能を把握し、主題または主語省略を指導する意識を高めなければならないことが再認識できた。

しかし、本稿の考察では、久野(1978)で挙げられたそれぞれの文をモデル文として学習者の許容度を調べたが、それらの文は日本語母語話者に許容度がどれほど見られるかが非日本語母語話者の筆者にとって興味深いところである。また、日本語母語話者が認める非省略の許容度はいかなる傾向になるか、日中対訳や作文ではどのような誤用に陥りやすいのかなども今後の課題にしたい。

〈注〉

1. 本稿は「江蘇高校哲学社会科学プロジェクト：交互視域下日汉语篇中省略表达的对比研究(2019SJA1462)、南通大学「人才引进プロジェクト：日本語における主語省略についての研究(03081044)」のもとで行われた研究成果の一部である。
2. 久野(1978: 146, 148-149)は「発話当事者の視点ハイアラキー」と「談話主題の視点ハイアラキー」など一連の視点制約を提唱している。「発話当事者の視点ハイアラキー」とは、「話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない(1=E(一人称) ≥ E(二・三人称)) (久野 1978: 146)」ということである。「談話主題の視点ハイアラキー」とは、「談話にすでに登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である(E(談話主題) ≥ E(新登場人物)) (久野 1978: 148-149)」ということである。
3. 久野(1978: 134)では、「文中の名詞句のXの指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感(Empathy)と呼び、その度合い、即ち共感度をE(x)で表す。値0(客観描写)から値1(完全な自己同一視化)までの連続体である」とされいる。久野(1978)は一般原理として、「視点の一貫性」を指摘している。即ち、「単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない」(久野 1978: 136)。

参考文献

- 小川泰生 (1989) 「日中対照研究—主語の省略について」『言語文化研究』15, 1-19.
- 門脇薫 (1999) 「初級における作文指導—談話展開を考慮した作文教材の試み」日本語教育 (102), 50-59.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
- 砂川有里子 (1990) 「主題の省略と非省略」『文藝言語研究・言語篇』18, 筑波大学, 15-34.
- 田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」田窪行則 (編)『視点と言語行動』くろしお出版, 13-44.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
- 仁田義雄 (1999) 『日本語のモダリティと人称』2版 (増補), ひつじ書房.
- 藤森弘子 (2005) 「結束性の観点から見た初級日本語学習者の作文」東京外国語大学留学生センター論集 (31), 95-109.
- 三上 章 (1969) 『象は鼻が長い』くろしお出版.
- 宮谷敦美 (1999) 「初級学習者の作文に見られる談話レベルの問題点の分析—初級作文のシラバス作成に向けて」岐阜大学留学生センター紀要 (2), 38-47.
- 本郷智子 (2004) 「学習者はモデル文をどのように認識しているか—初級作文活動のモデル文再考—」『日本語教育方法研究会誌』11 (1), 14-15.
- 王珊珊 (2016) 「浅谈第二外语教学中日语主語省略问题的教授方法」『科教文匯』13, 175-176.
- 高雅雯 (2013) 『中日主語省略的对照研究』重庆大学 修士論文.
- 谢梓飞 (2019) 「汉日主語省略的对比研究」『文学教育』22, 172-175.
- 许媛 (2019) 「人称代词做主語的省略现象在日语初级阶段教学中的应用——以《(新版) 中日交流标准日本语 (初级)》为例」『文化创新比较研究』26, 98-99.
- 邵小丽 (2012) 「以《雪国》及其译本为例看汉日主語省略现象」『牡丹江大学学报』10, 103-107.
- 徐鸿丽 (2017) 「日语省略表达及其文化成因」『淮海工学院学报(人文社会科学版)』15(11), 63-65.
- 张桐赫 (2007) 『主語省略现象的日汉对照』湖南大学 修士論文.
- 楊丽华 (2013) 「日语会话中人称主語的省略及相关教学建议——以第一人称和第二人称主語的省略为例」『无锡商业职业技术学院学报』5, 87-90.
- Givón, T. (1983) *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*. Philadelphia, PA: John Benjamins.
- Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. (1976) "Subject and Topic: A New Typology of Language." In Charles N. Li. *Subject and Topic*. New York: Academic Press. 457-489.
- Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley & Los Angeles: The University of California Press.